教科書について
「楽しく学べて、コミュニケーション力が付く教科書」を求めて
考えてみませんか？

皆さんはこれまで、どんな教科書に出会い、どんな「付き合い方」をしてましたか。長年、既存の教科書について疑問を持ちながら考え、試行錯誤を重ねた現場の教師たちから『できる日本語』という新しい教科書が生まれました。その壮大な作業の過程で教師が学んだこと、考えたことを、皆さんと共有していきたいと思います。

第8回 21世紀の日本語教育は“対話”重視 1

対話と会話の違いを意識しよう

新聞やテレビを見ると、政治問題、経済摩擦、教育問題などさまざまな分野で「対話での解決を模索しています」といった表現が、よく使われています。

ところで、「対話」と「会話」の違いは何でしょうか。対話は「ダイアローグ(dialogue)」であり、“dialogue”はギリシャ語“dialogos”という言葉から生まれました。“logos”は「言葉」、“dia”は「～を通して」という意味を表します。言葉を通してつながる、話し合いをすることが“対話”なのです。

今年8月に天津で行われた日本語教育国際大会で、劇作家平田オリザは、対話とは「あまり親しくない人同士の価値や情報の交換、あるいは親しい人同士でも価値観が異なるときに起こる擦り合わせなど」と定義しています。いろいろな考え方、定義がありますが、私は、対話とは「異なる価値観を持つ人とやり取りをする中で、聞き手と話し手双方が、他者理解と自己理解を図り、新たな価値観を創り出すもの」だと考えています。

では、日本語教育では対話教育を積極的に行っているかというと、実際にはあまり「対話」と「会話」の違いは意識されていません。初級では会話力アップを目指し、中級になると「議論やスピーチがちゃんとできるように」と意気込み、さらに上級になると「ディベートができるクラスにしなくては……」となります。どうも「対話力を付けてもらおう」という教師の意識は、あまり見えてきません。

実は、一つのクラスで、異なる文化・価値観を持った人々が共に学ぶ、日本語教育の現場こそ、まさに「対話の場」として理想的な所だといえるのですが。

こうした対話という視点で初級教科書を見てみると、問題点が浮かび上がってきます。まず最初に文型導入、文型定着のための練習、そしてその文型を使っての応用練習。ロールプレイといっても、その課で習い覚えた文型を使うためのモノだったりします。場面状況があるといっても、それは「その文型のための場面設定」でしかないのです。同様に、その文型を使った会話練習が求められます。

異なる文化・価値観を持つ学習者が、その違いを出し合い、話し合い、さらに新たな価値を創り出すことに、日本語学習の意味、対話を軸とした教育の意味があるのです。習い覚えた文型・語彙(ごい)を駆使して、自分の言いたいことを伝え、他者と語り合い、新たな価値を創造する過程こそが、意味あるものだと言えます。

もちろん会話力アップも、とても大切

ですが、同時に対話力アップを図ることで、「伝え合う／語り合う日本語」「自己表現のための日本語」、そして「人とつながる日本語」が可能になると言えます。

「初級で、対話だなんて！」という声がよく聞かれますが、それは思い込みでしかありません。また、「初めに文型ありき」の教科書を使っていると、文型を磨き上げることに力を注ぎ、ついつい文型に目が行ってしまい、「何のために文法・語彙を学んでいるのか」ということが、なおざりになりがちです。

ここでちょっと「初めに行動目標ありき」の教科書『できる日本語 初級』を見てみます。14課「国の習慣」は「異なる文化の中で楽しく生活するために、習慣・文化・ルールを知り、自分の意見を簡単に言うことができる」ことが、課の行動目標です。14課を勉強しているクラスで、日本人を招いた授業がありました。次は、そこでのやり取りの一部です。

留学生A：日本人の若い者は、いつも、お年、人（お年寄り）に席を譲りません。びっくりしました。譲らなければなりません。本当に変と思います。

日本人：Aさんは譲りましたか。

留学生A：あの、私も見ていました。譲らなくてもいい感じしましたから。

日本人：他の人はどうですか。そういう経験、ありますか。実は、私は、とても疲れているときは、譲りません。

留学生B：私は、します、します。年上？ 年をとった人は、譲ります。

留学生C：日本は家が遠いですから、疲れている人が多いと思います。だから、日本人がお年人を見たときに、席を譲らないと思います。

留学生D：ちょっと見て、「自分の国と違う」考えてはいけませんね。

日本人ビジターもびっくりするほど、いろいろな対話ができた授業でした。

Column 「ニッポンには対話がない」って、ホント？

「『ニッポンには対話がない』、ずいぶん刺激的なタイトルですね」とA先生、B先生の本を見て呟（つぶや）きました。これは、平田オリザ（劇作家・演出家）と北川達夫（フィンランドメソッドに関する教材などの著者）の対談集です。そこに現れたのが、いつも対話の重要性を主張しているC先生。先週、平田オリザのワークショップに出てきたC先生を中心に、「対話談義」が始まりました。

「彼によると『忠臣蔵』で松の廊下事件が起こるまでは、赤穂藩士の間でいわゆる『対話』はほとんどなかった。でも、事件にどう対応し、どう生きるべきか、価値観・人生観を見直し、そこから『対話』が始まった、ってわけ。対話が生まれる場づくり、仕掛けが大切なのよね」

これを聞いて、みんな「対話を意識していなかった自分」「授業でただ意見を言わせていた自分」に気付きはじめました。

嶋田和子
イーストウエスト日本語学校副校長。
外資系銀行勤務の後、専業主婦を経て日本語教師。
現在は、日本語教育業界を牽引する
ベテランの一人として、学習者への
日本語教育はもちろん、教師養成にも当たる。
著書に『目指せ、日本語教師力アップ！
―― OPIでいきいき授業』（ひつじ書房）、
『キムチと味噌汁―韓日、異文化交流のススメ』
（教育評論社）、『ワイワイガヤガヤ 教師の目、
留学生の声 ―― 異文化交流の現場から』
（教育評論社）など、多数。
『できる日本語』（アルク）監修

連載ラインナップ

第1回　教科書を考えるって面白い！
第2回　どんな教科書と付き合ってますか？
第3回　タスク先行型授業にチャレンジ！
第4回　「わかる」から「できる」へ
第5回　漢字学習も「できること」重視！
第6回　「プロフィシェンシー」で、教師力アップ！ 1
第7回　「プロフィシェンシー」で、教師力アップ！ 2
第9回　21世紀の日本語教育は"対話"重視 2
第10回　自律的な学びを支えるモノ
第11回　「学習者が話したくなる」教科書とは？
第12回　対話で新たな日本語教師人生を！